

子ども、家庭、地域の未来を織りなす人

権田 千里さん

石川県能登地方の七尾市生まれ、小中高校時代を地元で過ごす。地元の大学を卒業後、NHKに就職しディレクターとして番組制作に携わる。現在は豊島区千川で帯作家をしつつ、夫と子の3人で暮らしている。ここ数年で、保育士と社会福祉士の資格を取得し、様々な地域活動に参加している。

帯作家として活躍されていて、家にある織り機でこれまでに様々な作品を織ってこられた権田千里さんには、もう一つの顔がある。それは、千川や高松等で、多くの地域活動に携わり、地域住民として同じ土地に住む子育て世帯や児童たちを支えていることである。世代間交流サロン『せんかわ』ふるさとひろば「子育てサロン」ながおかさんちと「まちの赤ちゃん保健室」、区民ひろば高松、地域福祉サポーターなどに関わり、どの活動でも子育て中の親子に丁寧な気配りをされ、多くのママ達から信頼をよせられている。なぜ、こんなにも多くの活動に携わるかというと、権田さんは「地域で子ども達が健やかに育つためのお手伝い

をすること、そして誰も孤立しない地域づくり」を目指しているからである。「子育てはとても大変なことなので、子育てしやすい環境を整えること」が大切だと考えている。さらに、「自分を大切にすること。自分自身を大切にできる人は、他人のことも大切にできる人である」と権田さんは語る。そして、「自分がやってほしいようにやり、やってほしくないようにやらなければ皆が幸せでいられる」と感じているという。高松小PTA時代に、地域福祉をやりたかった自分に気づくエピソードが

自分を大切にすること。自分自身を大切にできる人は、他人のことも大切にできる人

ある。夏休みに子どもの防災キャンプに取り組むことがあった。おやじの会との協働行事で一緒に仕事し地域のお父さん達の熱い気持ちを知り、かつ町会も同じことをしようとしていると思った。「地域と学校がともに子ども達のために活動を行うこと」が自分のやりたかったことだと気づいたが、PT



1 笑顔があふれる権田さん 2 地域の世代間交流の瞬間 3 スマイル 4 ママさん、ようこそ! 5 たくさんの帯が生まれた織り機

おおはし ふみのぶ
大橋 史信さん

1980年5月7日生まれ。豊島区内に引越してきた小学3年頃からいじめにあい、生きづらさを感じ始める。それ以降、本人曰く、生きづらさの5冠王「いじめ」「不登校」「家族との確執」「発達障害」「ひきこもり」を体験した。自身の体験と、中学時代の肢体不自由の同級生との出会いから、何か人の役に立つことをしたいと、福祉の道を進むことを決意。介護職、教育、就労支援、NPOなど、対人援助の現場で自らの経験を今地域で悩んでいる人に伝えることに使命感を感じ働いている。現在はひきこもりの支援活動をしている。「楽の会リーラ」に所属している。

「体重以外なら何でも答えるよ！」気さくに取材に応じてくれた大橋さんは、自身の人生を振り返り、第1ステージと第2ステージがあると話す。

第1ステージは、とことん悩み苦しんだ段階だ。小学3年時にいじめが始まり、以降小学校、中学校、高校、大学から30代始めまでと生きづらい日々を体験する。特に高校時代は両親との

折り合いが悪く、授業にもついていけず、友達もできず、自殺未遂を起こしてしまう。学校にも家にも居場所がない、まさに「地獄」の状態であった。大橋さんにとって第1ステージは、同世代が経験してきたことを経験してこなかった「青春貧乏」であったと話す。現在は第2ステージの半ばにいますという。第2ステージとは自分の生きづらさに気づき、その経験を通して、同じ思いをしている人や地域を支援する段階である。

当事者である大橋さんは、なぜ支援

自らの経験が、
今悩んでいる人の助けとなると信じて

者は当事者のことが分からないのかと憤りを感じたことがあるという。しかし、支援者として関わってみると、当事者が自分のことを語っていないことに気づく。そんな中KHJ（全国ひきこもり家族会連合会）に出会い、自らピアサポーターとしてかわることを決意する。それから現在までひきこも



1

り支援に力を入れているが、その理由は両親との心の溝がまだ埋まっていないからであり、同じような悩みを抱えている人に、自身の経験が役に立つと信じているからだ。

ひきこもり当事者とは本人であり、家族であり、地域住民である。程度は違えどもみんな何かしらで悩んでいる。その中で、大橋さんという存在は稀有なものだといえる。熱く語っていただいた大橋さん。只今「伴侶募集中」とのこと。



2

3

4

5

1 熱く語る大橋さん。「伴侶募集中」とのこと 2 対談の様子 3 楽の会リーラの仲間と一緒に 4 今とは髪型が違う大橋さん 5 豊島情熱基金準優勝

使命は地域の高齢者を元気にすること

伊藤 登さん (元気!ながさきの会代表)

2001年、東京都健康長寿医療センターと豊島区が認知症予防の活動を提唱したことを機に「元気!ながさきの会」は発足した。太極拳、パソコン講座、男の料理、フィットネスなど12のグループがあり、プログラム参加者は200名を優に越えている。90代は10名、80代に至っては「ごろごろ」という。伊藤登氏は発起人の一人であり、現在3代目の代表として会を牽引している。

新たなステージは「地域」

65歳でそれまで経営していた会社を後進に譲り、伊藤さんは新たな活動のステージを「住んでいるまち」に求めた。きっかけは2001年に伊藤氏の住む長崎地区で行われた東京都健康長寿医療センターと豊島区が実施した認知症予防プログラムである。かねてから「高齢になってから地域に馴染めない人は寂しい。歳をとっても地域で楽しく暮らしたい」と思っていた。その時の決断を今も本当に正解だったと振り返る。プログラム参加者の中から自発的に活動を継続する会を立ち上げよ



1 人生を柔和に語る伊藤さん 2 第5回プラチナ・ギルドアワードでの講演 3 第5回プラチナ・ギルドアワード表彰状
元気!パソコングループのみなさん 5 優雅で力強い「陳式扇の演武」

うという機運になり、当時80代、70代、そして60代の伊藤さんの3人を発起人として「元気！ながさきの会」が発足した。会はあえて「会長」を置かず、会員それぞれが自主性を活かした活動ができる自由度を確保している。「会員それぞれのそれまでに培った多彩なスキルを活用した総合的なマネジメント力の高さが当会の最大の特徴で活発な活動の裏付けとなっています」と自信を持って語る。まさに経営者経験に裏打ちされたマネジメント戦略である。

伊藤さんは1935年岐阜県恵那市で生まれる。山に囲まれた土地で「やることは登山しかなかった」と笑う。わんぱくな少年時代、お寺の息子と白堀をわざと汚すいたずらをして住職に見つかつた。住職は何も言わずに二人を本堂にいざない、読経の後ろに正座をさせた。ちよつとでも動くど注意されるのでそれが何より辛かつた。声を荒げて叱るよりも自分の後姿で叱る、**「本当の叱り方」**を学んだことはその後

の人生に多いに役立ったと語る。その後上京、学生時代は「将来は世界中を飛びまわれる仕事に就きたい」と熱心に語学を習得した。念願叶って外資系航空会社に就職して仕事で世界中に行くことができた。これが第1ステージ。そして第2ステージは34歳で、それまでの経験を活かし会社を立ち上げ経営者となる。決して順風満帆とは行かなかったが、子ども時代に母親から跡継ぎとして厳しく躰けられた苦しい経験が後の力となって苦境を乗り越えることが出来た。時代の要請もあり会社は軌道に乗り多くの従業員を抱えるまで成長したが65歳できっぱり区切りをつけて今の人生につながる第3のステージに乗り出したのである。

太極拳で健康づくり

「元気！ながさきの会」の活動では伊藤さん自身も大いに楽しんでいる。会の発足の年に始めた太極拳は全国大会で負け知らず。伝統拳の部で連続1位の座を守っている。本人は「自分も若干

は衰えてきているが、競争相手が少しづついなくなるから」と苦笑。一番の効能は脳と身体の両方を鍛えられることだという。また人気のシニアパソコン講座、そこから派生したグループは月々金まで毎日開催するほどである。生徒として習い講座を修了すると、次はサポーターとして教える側に回るのがポイント。高齢者の特徴である、教わってもすぐに忘れる、を身をもって知るからこそ、じっくりと指導できる。これが自分の家族に習うとなると最悪で、すぐに教える側の堪忍袋の緒が切れて険悪になってしまうらしい。高齢者が高齢者に習うことが習得の一番の近道だという。

今は生徒1人に対してサポーターが5人付くほどの充実した指導体制と胸を張る。パソコンは企業からの寄付を取り付け、会場は地元医院の空き部屋を提供してもらっている。多くの人が応援したくなる会、それが「元気！ながさきの会」である。

大切にしている3つの考え

インタビュ어의最後に「後の世代に伝えたいメッセージ」を聴いてみた。

- 一、それぞれの信念に基づき、やりたいことを早く見つけて実現に努力すること
- 二、与えられた仕事に全力で取り組むこと
- 三、人に奉仕をすること、自分も楽しむ周りも良くなること

以上3つの格言をいただくことが出来た。伊藤さんの人生そのものがこの言葉の中にすべて含まれていると納得させられた。

長崎地区、いや豊島区が誇る「元気！ながさきの会」はこれからの高齢化社会の不安を払拭すべく社会実験として着実に効果をあげており、私たちに希望を与えてくれる存在である。会のモットーは「好きなことをやり、楽しくイキイキ元気に！」。理想の姿がここにある。

会員それぞれの人生で培った多彩なスキルが会の原動力です

その場所に住むことを楽しみたい

Urban Meetup Tokyo

竹内 智則さん 徹さん

雑司が谷の路地を入ると、おしゃれな木製の看板が目に入る。その建物「雑司が谷Neighborhood House」で国際交流シェアハウスを運営しているのが竹内兄弟だ。21歳、26歳という若さで事業の立ち上げに踏み切った二人の実行力の根幹にあるのは、「自分が本気で打ち込めることを仕事にしたい」という強い思いだ。

(Neighborhood = 近所)

竹内兄弟の歩み

現在、兄弟で「Urban Meetup Tokyo」という会社を設立し、地域を楽しむ国際交流シェアハウス「雑司が谷Neighborhood House」や国際交流イベント「Urban Meetup」の活動のための英会話「Street Language School」等を実施している。20代の若さで、起業に至った経緯や想い、原動力は何なのか、お話を伺った。

弟の徹さんは、高校卒業後大学進学が決まっていたらしい。ところが「本気で」考えた「本」に「こ」した「こ」は「こ」と考え直して、18歳で西表島へ移住、ツアーガイドを



1 竹内智則さん(右)、徹さん(左) 2 路地でイベントを開催! 3 おいしい料理を用意 4 Meetupイベントの様子 5 子どもと一緒にシャボン玉

経験した。外国人観光客と接していく中で、元々興味のあった外国の文化への関心が高まり、フィリピンへの語学留学へ踏み切った。帰国後も、外国人と交流する機会を求め、「ミートアップ」という交流イベントに積極的に参加。そこでオーガナイザー（企画者）から「運営を手伝ってみたいか？」と声を掛けられ、イベント運営のアシスタントをしたことが現在の活動を始めたきっかけと言う。もっと外国人との交流の機会を持ちたい、自身でもミートアップイベントを開催したいとの思いを抱いた。

「音楽を仕事にしよう」兄の智則さんは18歳で上京し、音楽の専門学校へ入学。卒業後ミュージシャンとして活動をしてきたが、怪我により続けられない状況となった。「これから何をして生きていこうか」そう考え向かったのは徳島県。地域おこし協力隊として2年間活動をした。当初は、話の合う仲間がでず、お祭りに参加しても、周り

は友人や家族と一緒に楽しんでいる光景を目にし、孤独感を抱いたとのこと。転機は、家の隣の柔道場に一人の外国人が引越してきたことだった。

隣に越してきたマツトさんとは、共通の音楽の話題などで意気投合し、互いの経験等を語り合うことができた。マツトさんが柔道場にトレーニング機器を置いたところ、外国人が自然と集うようになり、一緒に食事をすることが日課に。「地域の中に居場所ができました。様々な経験をし、広い視野をもった彼らと過ごした時間は本当に楽しかった。」孤独感を感じていた時に見ていたまちも、参加したイベントも、友人と一緒にならどれも本当に新鮮で、違う景色が見えたと言う。2年間の活動後、徹さんと一緒に活動するために上京した。

東京での国際交流活動

平成28年11月、徹さん主催のミートアップイベントを初開催した。日本人と外国人が集まり、参加者同士が思い

いに話し、交流するものだ。会場確保のため高田馬場周辺のカフェを数件回り、利用交渉をしたとのこと。外国人は日本に来て、日本人と接する機会は少ないという現状もある。このイベントを通して、参加者が互いに交流し、友だちになることを狙っている。

参加者を募るため、当時徳島にいた智則さんがチラシを作成。そのチラシを持ち、徹さんが日本語学校へ周知に回ったり、道で会った外国人にも積極的に声をかけたりと周知にも力を入れた。最初は5人くらいの参加者だったのが、20人、30人と増えている。

「地域の中で自分たちの居場所をつくること」友人と一緒に地域に参加することによって得られる楽しさや刺激を、この東京でも体感してもらいたい。そんな思いからシェアハウスの準備を始めた。物件探しでは、「シェアハウス」と「外国人」という二つのハードルがあったが、所有者との話し合いを重ね、契約することができたとのこと。

と。平成29年7月に国際交流シェアハウスをオープンした。

「徹は人とのコミュニケーションがうまい」「智則は戦略的に動くことができる」と、互いに認め信頼し、得意を生かしながら二人三脚で歩んでいることがよく分かった。

引越してからは、町会や近隣へ挨拶に回った。町会長も好意的で、バーベキュー中に雨が降った時には町会のテントを貸してくれた。周囲に住む方々とは、お祭りの道具を借りたり、新聞紙をもらいに行ったり、お返しに料理を持っていったりと交流を持っている。

現在は、日本語学習や英語学習なども実施している。「日本で就職したいが難しい…」という悩みを聞くようで、今後は外国人の就労支援にも取り組みたいと力強く語ってくれた。外国人人口が1割近くを占める豊島区。二人の今後の活躍に注目したい。

“地域の中で自分たちの居場所をつくること”
“得られる楽しさや刺激を感じてもらいたい”

“友人と一緒に地域に参加すること”
“によって”

自然体で「福祉の再構築」に挑む

藤岡 聡子さん

第3子出産準備のため、惜しまれながら今年2月末で終了した「長崎二丁目家庭科室」の主催者である藤岡さん。住宅型老人ホームの立ち上げ、子育て中の親が政治や人権について話し合う場の運営、デンマークへの短期留学などを経て2015年に株式会社オロロを起業した。自身の経験から「人の育ち」「学び直し」「生きて老いる本質」をキーワードに「福祉の再構築」を目指すという理念をかかげて地域に飛び込んだ藤岡さんの実践は実に地に足の着いたものだった。

椎名町駅前の商店街にある築45年の民家をリノベーションした小さなまち宿「シーナと二平」を会場に、「長崎二丁目家庭科室」は2017年4月にスタートした。その1年前から全8回の茶話会を開催し延べ100人の地域住民を集めた。地域のシニア世代を掘り起こしてその人が人生や仕事について語り、それを若い子育て世代が聴くという場である。そこで起きる「人と人との化学反応」が何より地域のパワーになることを実感し、生活に密着した

「家庭科」をキーワードに「長崎二丁目家庭科室」は展開されることになった。なぜ「家庭科」なのかという問いに「家庭科は暮らしの教科です。日常の暮らしから分断されがちな縦割りの福祉に疑問を感じていました。シンプルにその人が得意なことを誰かの喜びにつなげたいのです。シニアの経験豊かな人が編み物でも洋服のリメイクでも料理でもその人の得意なことを子育て中の親や若手社会人、大学生などに教える場を提供することで暮らしの知恵を継承していきたいと考えています。その

その人の得意なことを 誰かの喜びにつなげたい

横に障がい者が描いた作品が展示されていることで自然に彼らの才能に出会える。世代間交流と福祉の様々な分野が交錯する場を、わざとらしくなく創りたかったのです。」
この思いから、世代をつなぎそれぞれの年代に合わせた健康の保ち方を学んだり、介護・福祉についてまちの人



が知る場所がここにつくられた。短期間ではあったが、この試みは地域福祉の実践として確実に功績を残したといえる。家庭科室スタートから11ヶ月で延べ1000人以上の来場があったことが何よりの証拠である。活動の一部は利用者自らが引き継いでいくという話も出ている。蒔かれた種が



1 藤岡さんと看板娘の長女 要(かなめ)ちゃん 2 家庭科室の時間割 3 元とんかつ屋を改装したお宿「シーナと二平」が会場です 4 「初めてのあみもの」の日 5 地域のベテランから技を伝授



椎名町で育つて実を結び、そんな嬉しい展開が予想される。藤岡さんは今後も椎名町をフィールドにお寺や福祉事業所とタッグを組んで新しい試みに着手する予定がある。自然体の福祉実践が巻き起こす風にこれからも期待したい。

明治安田生命保険相互会社 法人サービス部

明治安田生命は2017年4月に経営理念および企業ビジョンを刷新し、明治安田3カ年プログラム「MYイノベーション2020」をスタート。「お客さまとの絆」・「地域社会との絆」・「働く仲間との絆」の3つの絆を大切に企業ビジョンとして掲げる「信頼を得て選ばれ続ける、人に一番やさしい生命保険会社」を目指している。

豊島区高田にある明治安田生命事務センタービルの職員はこの1年、地域社会との絆を深めるため、様々な取り組みを実践してきた。多くの職員が豊島区民社会福祉協議会の地域福祉サポーターに登録し、地域で緩やかな見守り活動を実践中だ。

「ビルの中の人は異動する。しかし、常に人は存在し続ける」企業は地域の一員となり得ると力強く語る。

4年前より、毎週近くの特別養護老人ホームでボランティア活動を始めた。最初は細々と活動していたが、2017年度は毎回10名前後、合計28回、2

65名が参加した。2017年度はさらに、小学校や区民ひろば、町会等と

地域とのつながりを広げている。初めて実施した、小学校の自転車講習日の登校時見守り活動には38名が参加。これが信頼を築ききっかけとなり、区民ひろばまつりでは、校長先生からの後押しでビブスを作成・着用した。地域住民からも、「企業が歩み寄ってきてくれて嬉しい。頼りにしている」との声が上がっている。地域とつながり、地域に受け入れられるようになったのはやはり職員の想いが伝わっているからである。

墨昭宏さんは、「他人事ではなく、自分事として活動してもらえよう文化として広げていきたい」と話す。地域貢献活動は、自身がより良く生きることにつながっている。職員もごこの

地域社会との絆を深めるには
ずっと活動し続ける覚悟が必要



「地域住民」として活動する時がくる。また、親の介護など、福祉に接する機会がきつとくる。ここで培った経験が、在職中や退職後、いつか自分にプラスになって返ってくるということに気がつき、地域と向き合える自分づくりになげられたらと語っていた。知らない世界、遠い世界が実は身近にあることを知るきっかけになっている。

「地域とのつながりは、一度活動してそれきりではいけない。地域社会との絆を深めるにはずっと活動し続ける覚悟が必要」と話す姿からはこれからの活動への意欲を感じる。「明治安田生命の取組を知り、他企業も負けてられない」と思ってもらえたら」と話す。企業



1 高田3丁目にある明治安田生命高田馬場事務センタービル。2 法人サービス部 Kizuna 運動「地域社会との絆」チームリーダーの墨さん(右) 3 高南小学校登校時の見守りボランティア活動。

の多いこの地域をより一層活発にしてくれると期待したい。

Data

団体名 明治安田生命保険相互会社
法人サービス部
場所 高田3-35-1

空間の提供による社会貢献活動

株式会社ニュートン及びサンザ

ニュートン・サンザグループの取組みについて、がんばれ！子供村事務局の責任者である福田崇さんが語ってくれた。2008年7月に「がんばれ！子供村」が雑司が谷に開村し、子どもに関わるボランティア活動団体への無償貸出を始めてはや10年。現在では、「リゾートホテルの無料招待」や「子ども食堂」など、企業の強みを生かした社会貢献活動も実践している。

「カラオケパセラ」やそこで食べられる「ハニート」を知っている方も多いのではないだろうか。ニュートン・サンザグループは、飲食やウエディング、ホテルなど空間の提供を得意とした企業だ。なぜ社会貢献活動に取り組むのか？率直な疑問を投げてみた。その背景には、「収益活動と社会貢献活動の両輪で、人と人の幸せを繋いでいきたい」という会社の代表の想いがあると言っ

た。また、子どもは自分の力だけでは困難な局面を乗り越えることが難しい現実があることを知り、子どもの支援をしている団体に対して、活動の一助になればと「がんばれ！子供村」を開村した。

社員全員が年に1回休日、子供村に一日村長としてボランティアに来て、清掃したり利用団体の方々とコミュニケーションをとったりと活動している。「一人のために何ができるか」を考え、行動することはボランティアでも仕事でも通じる部分であり、異なる側面から見て考えることでさらに成長できると考えている。

子供村を運営し、様々な団体様と接点を持つ中で、病気や障がいのあるお子様がいる家庭やひとり親家庭など、様々な事情で旅行や遠出が難しい家庭があるとの実情を知り、ホテル経営をしているからこそその社会貢献活動として

収益活動と社会貢献活動の両輪で、

人と人の幸せを繋いでいきたい

どんな社会貢献ができるかと考えたときに、直接誰かを支援するようなノウハウは十分ではないが、「空間の提供」を生かした取り組みで、間接的な支援が出来るのではないかと思いつ



1 がんばれ！子供村事務局責任者の福田さん 2 がんばれ！子供村ビルの外観 3 貸出施設2階 4 貸出施設3階 5 貸出施設4階

て、夏休みのリゾートホテル無料招待を開始した。「ひとり親で普段仕事で忙しく、子どもとふたりでの旅行は今回が初めてです」等の声を受け取った時、やりがいを感じたと言っ

2016度からは地域の中のコミュニケーションの場・集いの場として「パセラ珈琲」の運営を始め、5月からは子

も食堂も立ち上げた。最初はなかなか子どもたちが集まらなかったが、少しずつ口コミなどで広まっている。企業と地域を結び、人と人の幸せを繋ぐニュートン・サンザグループの今後の更なる活躍にも期待したい。

Data

施設名	がんばれ！子供村 応援 したいな！大人村
開所日時	年中無休 10時～21時
場所	雑司が谷3-12-9
参加	事前予約
対象	様々な事情で悩んでいる 子ども、子どもを支援し たいと考えている大人
連絡先	03-5155-1653 (がんばれ！子供村事務局)

地域生まれ、地域育ち、地域の発展に尽力する

巣鴨信用金庫

「喜ばれることに喜びを」をモットーに、ホスピタリティ、あふれる応対で、満足度の高い信用金庫を目指す巣鴨信用金庫。その活動は金融機能にとどまらず、地域の頼れる存在として巣鴨の地域に根付いている。地域住民から愛される取り組みが、豊島区を中心に広がっている。

巣鴨信用金庫の創立は大正11年、企業倒産・銀行の貸し渋りなどが相次ぐ厳しい時代の中で、相互扶助の精神のもとに巣鴨町界隈の商工業者を中心とする33名の町民の出資によって設立され、2022年には創立100周年を迎える。様々な社会変革の中で、経営理念である「地域のお客様の繁栄と豊かな暮らしづくりのお手伝い」をしながら、地域と共に歩んできた。

巣鴨信用金庫は、地域住民の中から設立されたところがあり、地域の発展に尽くすことが第一という想いがある。そのため町会や商店街、住民とのつながりを何よりも大切に考えている。その思いは、地域の清掃活動や町会や商店街が企画するお祭りにも積極的に参

加することにつながっている。特に地域のお祭りでは、お祭りを盛り上げるべく、職員が巣鴨信用金庫オリジナルの法被を着て、町会の神輿を住民と一緒に担いでいる。職員からは「これまで店されている方と祭りで会ったときに参加していることをお互いに喜び合え、地域の一員として認められていると感じた」といった声が上がっている。また地域の子どもや子育て中のお母さんが気軽に立ち寄れる「すかもチビツ子SOS」として、店舗を開放している。巣鴨本店では、すかも地蔵通り商

町会や商店街、住民とのつながりを 何よりも大切に考えている

店街の「4の日」に合わせて、3階を「おもてなし処」として利用する人々の休憩所として開放し、月に1回若手落語家による落語や講談をおこなっているなど様々な、地域との絆づくりを実践している。

地域との協働が多くなり、住民との距離が縮むと、もっとこの地域の為に



1「4の日」のおもてなし処 2年2回「四の市」 3経営企画部の中野エリ子さん 4本店営業部長の二瓶克博さん 5「すかもチビツ子SOS」の目印となる看板

地元を愛し、地域を元気にする活動の一役を担う。

地域とともに歩む

東京都理容生活衛生同業組合 豊島支部

街中にある、赤・白・青のサインポール。誰もが目にすることがある「理容店」のマークだ。その理容店が地域で行っている取り組みを、みなさんはご存知だろうか。

東京都理容生活衛生同業組合豊島支部（以下、「組合」）は理容店の業界団体であり、理容技術の研鑽だけではなく、組合員が連携して、社会貢献活動を展開している。今回は、支部長の稲葉孝博さんと副総務部長の中島健力さんから、地域との関わりや組合の活動について伺った。

稲葉さんは、豊島区生まれ豊島区育ち。昭和40年に両親が理容店をオープンし、稲葉さんは2代目。83歳になる母親もまだ週1回はお店にでており、今年4月からは3代目も一緒に仕事を予定。稲葉さんのお店では、町会のお祭りの日は必ず休みにして、若いスタッフ十数人と一緒におみこしを担いでいる。「若いスタッフが独立する時には同じように地域と交流してほしい」という思いが込められており、技術だ

けではなく、地域とともに歩む理容店の精神も受け継いでいる。

中島さんも豊島区生まれで、両親が区内で理容店を営んでいたが、早逝したため閉店となった。修業を終え独立するときに、稲葉さんにアドバイスを受け、両親がお店を開いていた町内で再びお店を出すことになる。すると、両親のことを覚えていた町会や地域の方々が、出店に協力をしてくれた。一度離れていたが、変わらず温かく受け入れてくれる地域なのだと感じた、と

若い人たちに、理容技術も地域への思いも受け継いでいきたい

いう。

そんな二人が所属している組合では、「被災地への雑巾寄付」「子ども110番」「ケア理容講習」など、多様な社会貢献活動を行っている。「被災地への雑巾寄付」は、東日本大震災の際に、理容店で使用されるタオルを寄付できないか、と考えたことがきっかけになっ



1

ている。今でも、全国で災害が発生した時に備えて、組合の女性部が中心となり雑巾を作り続けている。今後は、アタマジラミ感染予防のために、浴場組合と共同して子ども向けの頭の洗方講座などの企画も考えている。理容師は大変な職業と言われることもあるが、二人とも「好きでやっている



3



2



5



4

1 稲葉さん。弟子には世界チャンピオンが3人もいる 2 中島さん。しばらく見えないお客さんには電話で安否確認をすることも 3 タオル寄付。被災地への思いを込めて 4 子ども110番ステッカー。都内では、豊島支部がいち早く取り組みを始めた 5 ケア理容講習。高齢者や障がい者の方へのヘアカット時の注意事項などを学ぶ

るので苦に感じたことはない」「人を相手にするのは楽しい」と口を揃えて言う。その思いは仕事だけではなく、地域に対しても共通していると感じられ、これからも親から子、師から弟子へ、連続と受け継がれていくだろう。

あいおいニッセイ同和損保 東京北支店 池袋第一支社

あいおいニッセイ同和損保は、損保業界唯一のベルマーク協賛（製品にベルマークをつけることで社会貢献する）会社であり、東日本大震災後はベルマーク収集、寄贈で被災地支援を行っている。また、地元豊島区で美化活動や車いすの寄付などにも取り組んでいる。東池袋にある東京北支店池袋第一支社で、支社長の竹林隆佳さん、マーケティング開発部の佐藤順一さん、櫻井洋子さんからお話を伺った。

東日本大震災後は日本中が被災地に思いを寄せていた。

そんな中、あいおいニッセイ同和損保は、「会社の特徴であるベルマークを活かして子どもたちに教材や文具を送ろう」と、全社を挙げてベルマークを収集した。社内でボランティアを募り、役員、社員が一緒になってベルマークの仕分け、集計作業も行った。さらに外部にも収集の呼びかけを行ったところ、地域の方、学校や楽団、それまで取引の無かった企業などからメッセー

ジ付きでベルマークが次々と寄せられるようになった。

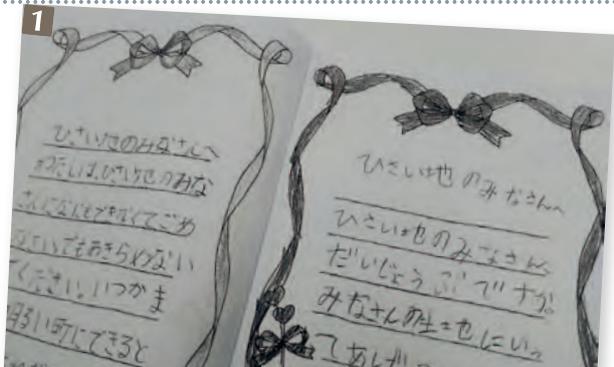
被災地を励ましたい子どもたちからの手紙や、被災地の子どもたちからの感謝の手紙も届けられ、多くの方の善意や子どもたちの思いに涙した社員もいたという。

竹林さんは学生時代、ラグビーと家庭教師などのアルバイトに忙しく、ボランティア活動は全く身近でなかった。しかし東日本大震災が発生し、社内ボランティアとして仕分け作業に参加し、

“仕分ける”という作業を高齢者の方々とも

ベルマークを贈った被災地の小学生からの感謝の声が心に響いたという。

同社では、地域の個人や企業にベルマークサポーターとして、ベルマークを集めるよう呼びかけており、現在サポーター企業は全国で5000社を超えている。また、寄付先は東日本大震災の被災地支援に限らず、地元の学校に還元することもしている。



1 小学生が手紙を添えて被災地にベルマークを送った。 2 池袋駅前の美化活動 3 ベルマークの仕分け作業。役員も社員も一緒になって 4 支社長の竹林さん。もっているのはベルマーク収集箱 5 ベルマークの仕組み

いわずもがなの高齢化社会である。PTAも共働き家庭が増え、ベルマーク活動もままならない。集めて寄付することから始まった活動だが、「仕分ける」という作業を、ベルマークのことを覚えている高齢者の方々にもやってもらえないかと思うようになりました。」と佐藤さんは言う。ベルマークの仕分けには、はさみで切る、会社ごと

に分ける、点数で分ける、集計するなどいろいろな作業がある。昔を思い出しながら作業する、それが社会貢献や地域との共生、世代間交流につながるのではないかというのである。

協賛会社から始まったあいおいニッセイ同和損保のベルマーク運動は、東日本大震災復興支援へ、そして地域のベルマークサポーターとともに地域貢献へと広がっている。



～地域を元気にするために
毎日頑張っています!～

「ふくじい」

(豊島区民社会福祉協議会キャラクター)

ふくじい プロフィール

- 誕生日** 8月28日 (豊島区民社会福祉協議会
創立日と同じ日)
- 年齢** 気持ちは20代の元気じいさん
- 好物** さくら餅
- 趣味** ボランティア活動
- 日課** 散歩を兼ねたパトロール
- 好きなことば** なにごとも全力投球
- チャームポイント** ふっさふさのヒゲ



豊島区民社協キャラクター
ふくじい

ふくじいの イメージ

歳を重ねても、明るい未来を予感させる
頼もしい高齢者像をイメージしています。
普段はどこにでもいる普通のおじいさん。
困っている人を見つけると、レンジャー
姿で助けに向かう正義の味方です。

「ふくじい」の 由来

「福」と「寿」を招く幸せいっぱいのシル
バーヒーローを意味しています。

ふくじいLINEスタンプを配信しています!!

中高生センタージャンプ東池袋に通う高校生の発案で、学生と社協の職員がアイデアを出し合い、「ふくじい」のLINEスタンプをつくりました。

区民が選んだ図案を、区内に住む漫画家の福田健太郎さんがLINEスタンプ用にかわいくデザインしました。

